①小樽市立手宮中央小学校（第３９期指定）

小樽運河中央橋での小樽案内人
ジュニア観光ガイドボランティア

報告者：北海道社会福祉協議会　福祉教育専門委員会　委員　藤田　宏治

・視察日時：令和元年９月２７日（金）
・視察場所：中央橋（小樽市港町）他

○序章

この度、福祉教育協力校の視察を行うに当たり、「福祉教育」について再確認してみた。

①福祉教育は、身の回りの人々や地域との関わりをとおして、どのような福祉課題があるかを学び、解決する方法を考え、解決のために行動する力を養うことを目的とする。身近な地域に暮らす、障がいのある人や高齢者を含めた様々な人たちと関わることを通して、コミュニケーション力を高め、多様な生き方に触れ、命の大切さや思いやりの心、相手を理解しようとする豊かな心を育む。

②また、出会いや関わりを通して、自分と違う立場の人と認め合い、人の気持ちに共感できる力や自分の考えを表現する力、考えを共有し実行する力等の「ともに生きる力」をつける。さらに、それらの活動で地域の人から感謝されたり、大切に思われていることを実感でき、自己肯定感や自己有用感を得られる。

③これらは子どもたち一人ひとりの「学び」や「育ち」につながるだけでなく、クラスや地域においても互いの違いを認め合い排除しない仲間づくりへとつながっていく。子どもたちが変わることで、大人や地域もともに学び、変わることができると考えられる。

（平成２５年３月　全社協リーフレット「地域との連携によりはぐくむ　ともに生きる力」から）

いわゆる地域共生社会の実現に向けての実践であり、地域共生社会とは、「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」ということである。

このことを念頭に、令和元年９月２７日（金）、小樽市立手宮中央小学校の「おたる案内人ジュニア」の活動を視察してきた。

○学校の概要

平成２８年４月に手宮小学校、手宮西小学校、北手宮小学校、色内小学校（一部）の４校の統合により開校となった同校では、新設校として様々な取組を進め、今年度の経営方針としても、コミュニティ・スクール化により“地域とのつながり”を図り、新学習指導要領に明記される“社会に開かれた教育課程”の具体化を図るとしている。

○視察活動の概要

そのような方針の中、統合校の一つである色内小学校が、小樽観光大学校（「おたる案内人」ガイドボランティアを養成）とＮＰＯ法人歴史文化研究所の協力により、小樽観光の次世代を担う人材育成を目的として平成２３年から続けている「おたる案内人ジュニア」の活動は、

・小樽の歴史に関する学習や、学習したことをもとに地域の方々や観光客等に発信する活動をとおして、おもてなしの心情を育てる。

・活動をとおし、指導してくださる方や観光客など、様々な人とふれ合うことにより、コミュニケーション能力の育成を図る。

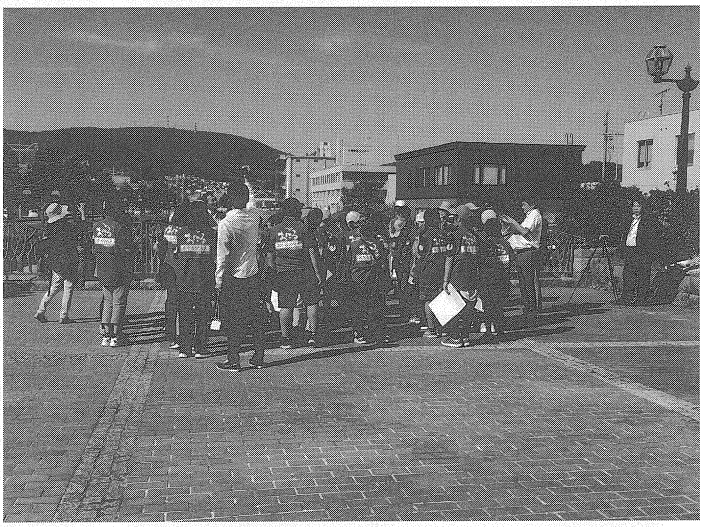
・活動の意義を理解するとともに、福祉への理解を図る。

を目的やねらいとして実施している。

活動を進めるにあたっては、以前から地域の人たちが気軽に声を掛け合う土壌が築かれており、この活動もＰＴＡの協力とともに、地域においても回覧板を通じて周知され、地域住民による協力体制も築かれている。

また、市の観光協会もバックアップしており、地域住民や地域の団体とも連携を密にしながら進めることができている。

中央橋に置かれた看板



活動前に校長先生のお話を聞く子どもたち

○活動の準備とその効果

活動に向けての準備としても地域との連携体制が確立されており、５年生から６年生にかけて総合的な学習の時間で５０時限という時間を、案内ボランティアの方が講師として指導に協力している。

学習の進め方としては、第５学年時に、小樽の歴史や文化などの基本情報を観光士の資格を持っている方から学び、第６学年時には、どのように伝えればよりよく理解してもらえるかを自分達で考え、観光地でボランティアができるように準備を進めていく。それにより、単に暗記するだけでなく、実践で役立つ応用力も身についていく。

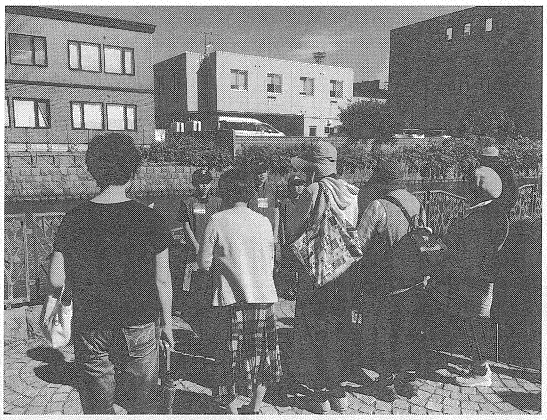
そして、実践を通じて、自ら進んでコミュニケーションをとる力がつくとともに、社会に出る力が培われていく。また、状況によって乗り越えなければならない難しい場面や壁にぶつかることも出てくるが、それを乗り越えることによって自信にもつながる等、「本物の活動」として達成感を得られるものとして担当教諭も実感できているようである。

○活動の様子

今回は、中央橋から竜宮橋を小樽運河沿いに往復するルートとなっており、各ポイントに児童４～５人で構成された担当グループが立ち、その場所にまつわる歴史や文化のガイドを５分程度行う。ガイド後、次のポイントにグループの代表の児童が誘導するリレー方式であり、１周でおおよそ３０分程度となる。

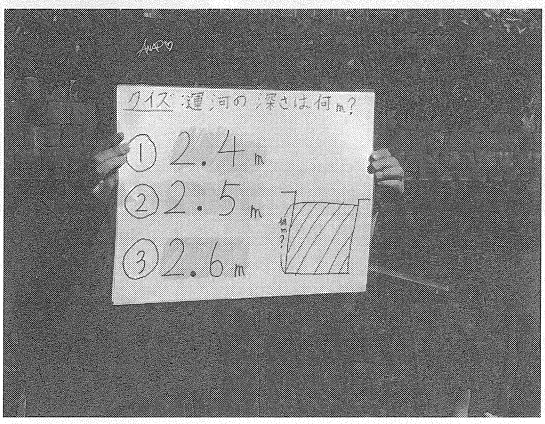
誘導時には飽きさせないようにプチ情報を挟みながら行っていた。また、ガイドの場面でも、自らＡ３サイズで作成し、雨天でも対応できるように考えられラミネートされた掲示物を適宜使用しながら各箇所の説明を行っており、身振り手振りを交えながら、分かりやすくハキハキと伝えるとともに、１問ずつその場所や文化にまつわるクイズを出題している。そのクイズの出題でも、全体の流れの中でタイミングよくオチをつけるなど、考え抜かれて楽しく小樽の歴史が学べるよう工夫がなされていた。

当日は、風などもあったため声が届かないケースもあったが、伝わるような声の大きさや話し方も実践を通じて対応できるようになり、また、例年より観光客も多めだったこともあり、より身になっていったとの担当教諭からの評価もあった。



活動の様子

作成した掲示物を使って説明する様子



運河に関するクイズを出す様子

小学生のガイドを聞く修学旅行生

手振りを交えて説明する様子

誘導しながらプチ情報を説明する様子

○活動後の展開

この活動の後、学芸会で学習した内容を劇化することで、自分たちの活動の意義を再確認するとともに、家族や地域の方々にも更に理解を深めてもらう効果がある。

また、校内新聞で周知することも含めて、この活動を単発で終わらせず更に広げていくことにより低学年にも伝わり、より小樽の良さを知るとともに社会に発信する力も養っていけると考える。

○全体の感想

今回視察した取組については、積極的に観光の振興を進めている小樽という地域性が基盤となっていることもあり、地元住民や関係団体と学校が一体となって進めている活動であり、総合的な学習の時間の講師を案内ボランティアの方が務める等、地域全体で児童の学びを支援し、一体となって取り組んでいる様子の一端がうかがえるものであった。

学校が地域社会と連携しながら、様々な人たちとの出会いやふれあい体験などを通じて生命の尊厳や人間の生き方について学び、それぞれの立場や心情を思いやることは重要であると思える。

また、活動そのものも校内ではなく地域に出ての活動であるため、地域の環境を肌で感じながら行う活動であり、その中で、地域性や文化が違う人たちとの触れ合いができ、本活動の目的でもあるコミュニケーション能力の育成を図るとともに、「共に生きる力」「社会で生きる力」を実践しているものとなっている。

子どもたちが、ふるさととなるわが街を、福祉の心に満ち溢れた心豊かな生活を営めるやさしい社会にする担い手となることが福祉教育のねらいであることから、今回視察したこの活動は大変有意義なものと感じられた。